様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０５２８

研究課題名（和文）論議書に記載された漢語アクセントの研究

研究課題名（英文）The study on the accent of Sino-Japanese words recorded in old Buddhism dialogues Synopsis

研究代表者
上野　和昭（UENO, Kazuaki）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：１０１６８６４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：この研究は、主として仏教界で使用される漢語のアクセントや漢語句を読誦する際の音調についての資料を提示し、それらを検索しやすいかたちにして公開することを目的とする。研究の成果として『補忘記』貞享版2冊・元禄版3冊それぞれの信頼できる影印を提示し、さらに声点付漢字索引を公開した。あわせて律家に伝わった漢語の読み方について記されている『南北相違集』版本1冊も、その影印と解説を公にした。このほか『補忘記』両版本を比較し、また同書に記載された漢語句の読誦音調についての規則を検証し、その学史的意義を確認した。

研究成果の概要（英文）：The goal of this study was to identify and introduce resources for the study of the accent pattern of Sino-Japanese words and phrases that were used in the Buddhist community in the Muromachi period. Another goal was to make these materials available in a formant that is useful for making queries. The reliable facsimile reproductions of two series of Bumooki (補忘記) have been published - 2 volumes of the Jookyoo edition, and 3 volumes of the Genroku edition, supplemented by a reference book that lists these Chinese characters with their accent annotations. A facsimile reproduction and its bibliographical introduction of Namboku-Sooishuu (南北相違集), where traditional readings of Sino-Japanese words in Risshu school were discussed, has also been published. Furthermore, differences of the two editions of Bumooki in their entries and accent annotations are investigated. The findings verify their importance for the study of Japanese accent.

研究分野：人文学

キーワード：日本語アクセント史　補忘記　南北相違集　声点　節博士　出合　読誦音調　呉音声調

１．研究開始当初の背景

（1）これまで漢語アクセントの史的研究は、日本漢字音研究の一環としてなされてきたが、日本語アクセント史の研究対象になることは少なかった。したがって、和語のアクセント史資料として早くから注目されてきた新義真言宗関係の論議書についても、そこに記載された多くの漢語にはあまり関心が向けられなかった。もちろん桜井茂治（1977）や石山裕慈（2008）らの研究によってある程度まではわかるようになっていたが、それでも十分とは言いがたいところがあった。

（2）これまで広く利用されてきたのは白帝社刊の『補忘記』貞享版・元禄版（複製）であるが、貞享版に解題などの付されることなく、また元禄版は錯簡があり、欠落も多く、必ずしも研究資料として十分なものとは言えなかった。そのうえ、渡辺綱也（1964）や桜井茂治（1977）付載の「比較対照字音語索引」は、語頭漢字からは漢語の検索ができたが、語中漢字からはできない状態であった。ほかの論議関係資料については書名が紹介されることはあっても、そのほとんどが利用できる状態には至っていなかった。そのような中で、高野山大学密教文化研究所（2009）が刊行されたのは画期的なことであり、今後それらを利用した研究が期待されていた。

（3）ただし仏教界に伝わった漢語アクセントが、当時の日常漢語と直ちに同じものとは断じがたく、これを日本語アクセント史の中に位置付けるには、まだ基礎的な作業が必要な状態であった。早く服部四郎（1933＝1942）が「漢語の四聲は隨分師傳を重んじた様だ」と述べたのにはじまり、近くは石山裕慈（2008）によって「呉音声調から人工的に導き出された、論義専用の抑揚が少なからず混入していると考えられる」という指摘がなされてもなお、どのような師伝や「専用の抑揚」があったのかについては、十分に解明されてはいない状態であった。

２．研究の目的

⑴ 論議書の原本調査とその公開

論議書、とくに真言宗関係の論議書は高野山大学図書館をはじめとして多くの資料が残されており、早くからその存在が指摘されてきた。それにもかかわらず、それらは一部を除きほとんどが、アクセント史研究の資料としては手つかずの状態で近年に及んだ。2009 年に高野山大学から『真言宗古字書資料集』が公刊されはしたが、これまで研究の基礎的資料とされてきたものすら、その全体が公にされていなかったり、正確に再現されていなかったりという状態であった。そこで、まずは原本調査によって信頼できる資料（とくにその本文）を提示することを、本研究の第一の目的とした。

（2）論議書の注記の検討と漢語アクセントデータの抽出ならびにその集成と公開

漢語アクセントデータは、すでに渡辺綱也（1964）、桜井茂治（1977）などによって逐次研究成果が公開されてきたが、これを有効に生かすには、どうしても呉音声調との関係を明らかにしなければならず、語頭以外に用いられた漢字からも検索する必要があった。本研究では、とくに『補忘記』について声点付漢字索引を作成し、さらにそれを諸資料に及ぼすことを第二の目的とした。

（3）論議書所載の漢語アクセントの検討

漢語アクセントの検討には、さまざまな方法が考えられるが、本研究では論議書の記載を咀嚼して理解し、それがどれほど所載漢語のアクセントや漢語句の音調を説明しおおせているのかを検証することを目指した。そのうえで、一つひとつの漢語に付された声点のあらわす音調と節博士のあらわす音調とを比較検討することにした。

３．研究の方法

（1）原本調査とその公開

本研究の方法は、第一に原本調査であり、最もよい資料を得てそれを公開するところにある。もちろん原本閲覧に際しては許可を得て写真も提供していただくことにした。これによって、従来知られていたものであっても、それを研究資料として正確に活用できるようにすることができる。

（2）論議書記載事項の検討と漢語アクセントデータの抽出と集成

第二に、これまでの漢語アクセント研究は、そこにあらわれた漢語と節博士を整理して検討するということにとどまっていた。もちろんそれは重要なことではあるが、その資料の著者（編者）がそれらの声点や節博士をどのように理解していたかについては必ずしも十分に考察されたとは言えない状態にあった。本研究はその点にかんがみ、論議書に記載された事項を検討して、それがどの程度有効な記述であるかについて検討することにした。

４．研究成果

（1）論議書のなかにおける『補忘記』の価値の確認

いくつかの論議書の閲覧によって、『補忘記』が、その中でもよく整備されて広く流布したものであることが確認された。『開合名目抄』『四声開合初心鈔』などは版本であるからある程度は流布したものと思われるが、語彙が未整理であったり、収録語数が少なかったり、また記載された説明も『補忘記』に比すれば整わないところがあって、従来とくに『補忘記』を重視してきたことには相応の理由のあることが分かった。ほかの論議書についても調査したものの多くは写本で伝わったもので、それぞれに特徴のあるものであり、宗派の伝統を感じさせるものであることが分かった。

（2）『補忘記』貞享版・元禄版の影印公開と両版の比較

①『補忘記』両版の原本調査を行ったところ、とくに元禄版の影印(白帝社刊)に不備が多く認められたので、あらためて善本を求めて影印複製を、アクセント史資料索引（21 号の1）として提示した。貞享版は金井英雄氏旧蔵本に、元禄版は秋永一枝氏蔵本により、それぞれ白帝社刊本との対照もできるようにした。

そのようにして、従来用いられてきた白帝社刊本との比較をとおしてみると、白帝社刊本（元禄版）が、その原本と思われる亀田文庫本（国立国会図書館蔵）を忠実に複製したものではないことが明らかになった。刊本には簡単な解説しかないので準拠本すら正確には分からないが、詳しく比較してみると国会図書館本であることは確かである。そのうえで各箇所の異同をみると、刊本を複製する際の不手際に帰すべき問題が少なからず見つかった。

その第一は地巻 29 丁裏と 30 丁表に相当する 2 頁分と同 31 丁裏と 32 丁表に相当する 2 頁分とがそっくりそのまま入れ替わっていることであり、第二は、たとえば天巻 24 丁表 1 行目の「重誉〈上上／徴徴〉」（声点と節博士は〈／〉内に記す。／の左が声点、右が節博士。以下同様）において節博士の一つが欠落していることなど数か所の相違が確認できることである。

貞享版については、白帝社刊本が準拠したとされる金田一本（河原崎吉左衛門刊）が調査できなかったので、刊本の不備は確認できないが、金井本（奥村源兵衛刊）と試みに比較したところでも、いくつかの違いがある。

②元禄版は貞享版の増補改訂として理解されてきた。たしかに元禄版（2,640 項目収載）は、貞享版（1,727 項目収載）に 943 項目を追加（30 項目を削除）しているが（重複項目はとくに排除せずに、それぞれ 1 項目として数えた）、その内容をみると一概に元禄版の記述をすぐれたものとばかりは言えないことが分かった。したがって、両版をそれぞれに見比べて検討する必要がある。しかし、なかには元禄版の節博士によって貞享版の不備を訂正できるものもある。

たとえば貞享版には「巻舒自在〈平上新濁平濁平濁／角角角角〉」とあるが、「巻舒」の声点〈平上新濁〉のあらわす音調は LLH であり（高拍を H、低拍を L であらわす）、それに対応する節博士は HLL であるべきだから、貞享版の「巻」に付せられた節博士〈角〉は誤りである。ところが元禄版のこの箇所には HLL をあらわす節博士〈[徴角]角〉が付せられており、これによって一部に改訂の行われたことが確かめられる。

（3）『南北相違集（南北音義抄）』版本の影印公開と『補忘記』との比較

仏教関係資料の影印公開の一環として、架蔵の『南北相違集（南北音義抄）』版本 1 冊(元禄十二年序)の写真を公開した。同書は、南北の律宗に伝わったもので論議書というわけではないが、仏教界に伝わる漢語の読みくせを知るのに好個のものとされてきた。その多くは写本で伝わったようであるが、版本はこれまで薬師寺蔵本しか知られておらず、それも二冊本であるかのような報告もなされていたので、手元の蔵本を公開する意義はあるものと判断した。

記載内容の多くは、泉涌寺の北京律と唐招提寺や西大寺などの南京律との間における名目や作法の違いを述べているが、高松政雄（1982）もいうように、南北律宗の違いをこえて、山門、寺門の違いにも言及していて、すでに仏教名目集の様相を呈している。そのようなことから、ここには論議書と照合できるものも含まれている。本研究では、同書の影印とともに、若干の解説も添えた。

たとえば本書(版本)には「羯磨」を「南云コンマ北云カツマ」とし、論議書『補忘記』では北京(泉涌寺)ではケモであるとしていて一致しない。その一方で本書の一写本(京大本)には「北云ケモ･･･山門ニハカツマ」とあり、これの方が『補忘記』と一致する。『補忘記』にはまた、コンマについて「律家ノ名目亦尒也」とも記している。およそ同じ時期に世に出た仏教名目集であることを思うと、これらを比較検討する意義もあるものと思われる。

（4）『補忘記』貞享版・元禄版所載の声点付漢字索引の作成と公開

『補忘記』両版所載の漢語項目は、貞享版 1,220 項目に対して元禄版 2,072 項目であり(両版共通 1,195 項目)、二字漢語で 1 項目となる場合が多いが、比較的長い漢語句で 1 項目をなすことも珍しくない。その多くの漢字には、一字一字に主として呉音声調を反映する声点が付され、さらに読誦音調を伝える節博士が添えられている。そこに見られる呉音声調と読誦音調との対応規則は、これまで「出合（いであい）の法則」と呼ばれてきた。このような価値ある資料を語頭漢字だけでなく、語中漢字からも検索できれば、呉音声調資料としての価値もさらに増すうえに、漢語アクセント研究にも資するところが大きいものと考え、所載漢字一字一字から掲載項目と声点・節博士とを検索できる「声点付漢字索引」を作成し影印とあわせて公開した。

たとえば「論」という漢字は「體字ノ時ハ平ナリ、用字ノ時ハ去聲上聲也」とあるが、これを検証しようと思えば、この索引によって容易にその実状を把握できる。すなわち「釈論」「論疏」などの体字のときは平声の声点が差され、「勿論」「論談」などの用字のときは去声または上声の声点が差されている。そのなかに「隠顕互論」「據實通論」「八迷戯論」などの「論」は用字であることがその声点から知られるのであり、これによって意味の理解がさらに進むものである。

（5）『補忘記』所載の博士指様とその意義の検討

博士指様のうち、二字漢語について、漢字

一字一字に差された声点と、その漢語の読誦音調をあらわした節博士との関係は、既述のように「出合（いであい）の法則」として知られているが、さらにそれらが連なって漢語句をなした場合の音調についての記載を検討した。

同書に記載された博士指様の第十四條と第十五條とは、二つ以上の漢語が連なって一つの漢語句をなす場合の、読誦音調と呉音声調との関係を述べたものであり、それによれば、二つの漢語から成る漢語句には、全体を一つのまとまりあるものとして唱える「一ツ物」の音調と、それぞれ別のものとして唱える「二ツ物」の音調とがあるという。本研究では、それを『補忘記』語彙篇(貞享版の上巻および元禄版の天巻・地巻)所載の漢語句について調査して、その妥当性を検討した。その結果、いくつかのことが明らかになった。

①「一ツ物」の音調とは、漢語句全体として、南北朝期にあったとされる「アクセントの体系変化」を被ったと思われるものである。

たとえば「此教餘教〈平平上平〉」を〈／徵[徵角]角角〉と唱えれば「一ツ物」であるというのは、「体系変化」以前に声点のあらわす音調 LLLHLL であったのが、一まとまりに変化して節博士のあらわす音調、すなわち HHLLLL になったことをいうのである。

②「二ツ物」の音調とは、漢語句を構成する漢語それぞれが「体系変化」を被ってのち、その後の音調で連なったものである。

たとえば、同じ「此教餘教」でも〈／徵徵徵角〉と唱えれば、「此教」は HHH になり、「餘教」は HLL のままで、これらが接して「二ツ物」の音調 HHHHLL になることをいうのである。

③「二ツ物」の音調の場合に、前項の漢語が下降調または昇降調の場合は、後項の漢語は低平調になって連なる。

④また、「二ツ物」の音調の場合に、前後の音調が変化した結果、高いところが一つにまとまるように続くときには、とくに読誦音調を調整する必要はない。

⑤後項の声点のあらわす音調が低平のとき、かつ前項の節博士のあらわす音調が高平または上昇であるときは、「一ツ物」であれ「二ツ物」であれ、読誦のときに後項の音調は低平調に唱えられる。

たとえば「聰明暗愚〈去上平平濁〉」には〈／[角徵]徵角角〉の節博士があり、これは LHHHLLL の音調をあらわす。意味上の構成は「二ツ物」の音調がふさわしいが、多くの場合、それが音調にあらわれない。

⑥前項の声点のあらわす音調が低平のときには、「一ツ物」と「二ツ物」との違いが明白になることがある。

たとえば、元禄版の「善惡無記〈平濁入上平〉」には節博士が二種付せられており、左譜は〈／徵[徵角]角角〉であり、右譜は〈／徵徵徵角〉である。左譜が「一ツ物」の音調をあらわし、右譜が「二ツ物」の音調をあらわす。「一ツ物」とは「善惡」について「無記(無記答)」であるということであり、「二ツ物」とは「善惡」と「無記(善悪いずれでもないもの)」ということで、これらが音調によって区別されることが分かる。

⑦前項が高平調または上昇調になり、後項の漢語の声点のあらわす音調が「出合」して高く始まる音調になるときには、これらにも「一ツ物」と「二ツ物」との違いがあらわれることがある。

たとえば「雜修靜慮〈入濁上平濁上〉」の場合は、貞享版には〈／角徵角角〉の節博士があり、元禄版には〈／角徵[徵角]角〉の節博士がある。これを解釈すれば、貞享版は「一ツ物」の読誦音調をあらわしており、元禄版は「二ツ物」のそれをあらわしているものである。

⑧漢語句によっては、声点の配列のぐあいで「一ツ物」と「二ツ物」との区別ができない場合もある。

たとえば「四種法身〈平平入去〉」は声点のあらわす音調が LLHLL であり、全体として変化しても、それぞれに変化しても、その音調は HHHLL であることに変わりはない。意味上の構成からすれば「四種の法身」であるから「一ツ物」と理解してよいものではあるが、これを音調によって区別することはできない。

以上が『補忘記』所載の漢語句の音調について、あらたに本研究によって確認されたことである。

同書の記載には不十分なところがあり、特徴的なところだけを記したという嫌いはあるが、「一ツ物」「二ツ物」という術語を用いて漢語句の構成と音調との関係を説明したところに学史的意義が認められるものである。

〈引用文献〉

服部四郎(1933＝1942)「補忘記の研究―江戸時代初期の近畿アクセント資料として―」『国語アクセント論叢』法政大学出版局
桜井茂治（1977）『新義真言宗伝『補忘記』の国語学的研究』桜楓社
渡辺綱也（1964）『貞享元禄補忘記漢字索引』『国語研究室』別冊 2
石山裕慈（2008）「貞享版『補忘記』の漢語アクセント『国語と国文学』85-3,69-80
高野山大学密教文化研究所（2009）『真言宗古字書資料集』小林写真工業
高松正雄（1982）『日本漢字音の研究』風間書房

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　３　件）

上野和昭「『補忘記』の貞享版と元禄版について」『論集』（アクセント史資料研究会），査読無，X ,2015,39-59
上野和昭「《資料紹介》南北相違集（南北音義抄）」『論集』（アクセント史資料研究会），査読無, XI, 2016, 17-50

上野和昭「『補忘記』に載る漢語句の音調について」『国文学研究』（早稲田大学国文学会）,査読有,179,2016, 54-67

〔図書〕（計　1　件）
上野和昭 編 『補忘記 貞享版・元禄版 影印ならびに声点付漢字索引』影印篇・索引篇 アクセント史資料研究会（アクセント史資料索引 21-1･2）,2016, 影印篇 169p, 索引篇 266p

６．研究組織
(1)研究代表者
上野和昭（UENO,Kazuaki）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：10168643